伊丹公論

復刊
第15号
通巻34号
年4回発行
（次号は5月31日予定）

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-7-4
☎072・784・8170

編集
伊丹公論編集委員会

サクラの盆栽に3色の花

南京桃に代わる特産へ
東野・大野で開発成功

開花した多色咲きのサクラを見る久保さん＝久保農園（伊丹市東野）で

1本の木から3色の花が咲くサクラの盆栽の開発に、伊丹市東野・大野地区の農家が成功した。このようなサクラ盆栽の開発は全国でも初めてとみられる。日本3大苗木産地の地域の1つで高い接ぎ木技術の伝統を持つ同地区ならではの快挙。ウメ輪紋病被害からの再生に向けた新たな試みに期待が高まる。

市の特産品だった「南京桃」

東野・大野地区の農家はこれまで、盆栽梅と南京桃を主要商品にしてきた。南京桃とは、ハナモモの台木に接ぎ木して赤・白・ピンクの3色の花を咲かせる観賞用のモモで、さらに枝を曲げる技法によって「枝垂れ桃」にした商品だ。大道芸の「南京玉すだれ」のように見えるのが名前の由来という。

伊丹の温暖な気候と土質が栽培に適していたことや、東野・大野地区が苗木生産や接ぎ木の技術に優れていることから盛んに作られるようになり、南京桃の生産量は全国シェアの9割を占めていた。

ウメ輪紋病の被害

しかし、平成24年（2012）7月にウメ輪紋病の発生が確認され、一帯は農林水産省により緊急防除区域に指定された。生産者たちは断腸の思いでウメ・モモ類を廃棄処分し、盆栽梅や南京桃の生産中止を余儀なくされた。

主要商品であったウメ・モモが栽培できなくなった生産者たちは、農業経営継続のため、マイヤーレモンなどの柑橘系果樹やオリーブ、サツマイモなど別の品目の栽培へと転換を図った。

技術活かす新商品の開発へ

そのような努力を続けるなか、東野・の生産者たちに一筋の光明が見えた。サクラが平成25年12月に規制の対象から外されたのだ。

サクラといえば、約100年前に日本から米国に贈られ、今なお国民に愛されている「ワシントンの桜」の台木を生産したのが東野の農家だった。

生産者たちは、ウメ輪紋病被害からの再生を図るべく、また長年培われてきた接ぎ木技術を衰えさせず、東野・大野の伝統を次世代に継承していきたいという思いから、1本の木に3色の花が咲くサクラの盆栽の開発に動き出した。

研究重ねて満開に

試作は平成26年10月に行われた。台木と穂木それぞれの熟成度や気候などから接ぎ木をするのに最適な時期を見極め、さらにどの品種を組み合わせるのか、またそれぞれ台木のどこに接ぐのがいいか、試行錯誤を重ねた。

そしてついに試作開始から3年、マザクラを台木にカワヅザクラ、ハヤザキオオシマ、オカメという早咲きの3品種を組み合わせた盆栽が、この3月にみごと花を咲かせた。濃紅、白、ピンクという3色の花が咲き誇る、南京桃のようなサクラだ。この成功は、東野の生産者たちに春を呼び込んだ。

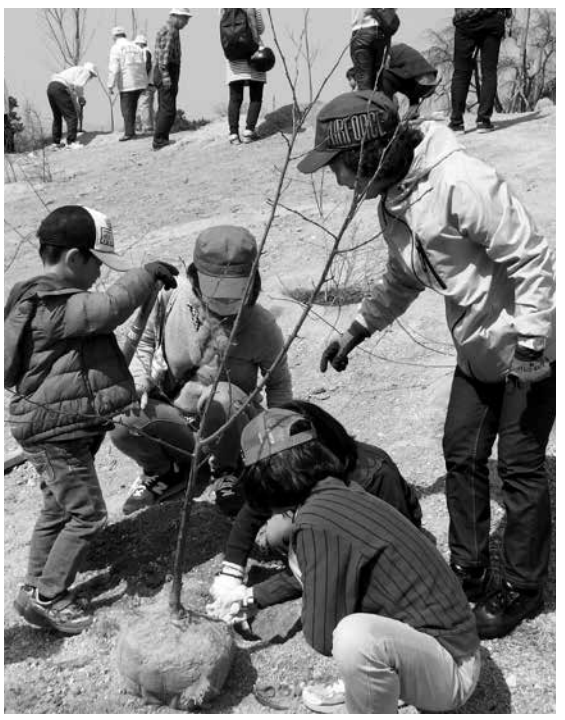
「ウメ・モモ・サクラ等生産者の会」会長の久保吉昭さん（53）は「多色咲きのサクラの盆栽が商品となるのはおそらく初めて。実際に販売できるようになるまで3年はかかると思うが、さらに研究を重ねて生育を安定させ、新たな主要商品にしていきたい」と力強く話している。

東野・大野の伝統を誇る伊丹の特産品として、全国に出荷される日が待ち遠しい。

大坪高樹・市農業政策課長　伊丹と縁の深いサクラで、新商品の開発が成功してうれしい。この開発を通じて接ぎ木の技術が継承され、ウメ・モモの栽培が再開されるときにはまた盆栽梅と南京桃の産地として復活することを待ち望んでいます。

緑ケ丘公園の梅林が桜の丘に

伊丹の苗木生産技術と市民の手で一大名所に



サクラの苗木を植樹する市民ら＝緑ケ丘公園で

ウメ輪紋病のため、4年前にすべての梅が伐採された緑ケ丘公園の梅林跡地に、29品種108本のサクラが植栽された。順調に成長すれば5～10年後には見頃を迎えるという。将来的には昆陽池公園、瑞ケ池公園ともに桜の回廊として、伊丹の新たな名所となることが期待される。

市内で栽培されていたウメの苗からウメ輪紋病が確認されたのは、平成24年（2012）7月。その後、平成26年には緑ケ丘公園の梅林からも感染木が確認され、市は国・県と協議の上、感染拡大を防ぐため、翌年3月に30年余り市民に親しまれてきた梅林のウメ379本をすべて伐採した。

市は、梅林跡地を再整備するにあたり、新たに植栽する樹種を平成27年7月の「広報伊丹」などで市民に公募し、最も意見が多かったサクラを中心とした花木を植栽することに決定、翌年9月から整備工事を進めた。今年3月20日には植樹イベントを開催し、サクラの苗木約40本を植栽した。

植樹イベントには、市が募集した市民や市民団体から総勢約160人の参加者があった。今後は樹木管理を行う市民サポーターを募集し、サクラへの愛着を深めるとともに、市民交流の場となることを期待している。

植栽されたサクラの中には、日本3大植木産地の地域の1つと称される、本市東野地区の高い苗木生産技術を象徴するサクラで、約100年前に日本から米国に贈られ、現在もワシントン・ポトマック河畔に花を咲かせている「日米友好の桜」の子孫樹のソメイヨシノも含まれる。カワヅザクラなど2月下旬に開花する早咲きのものから、オオムラザクラなど4月下旬にピークを迎える遅咲きのものまで、約2カ月間楽しめるようになっているほか、濃紅、薄紅、白、黄緑色など花の色も多彩なサトザクラ、香りを楽しめるハルメキザクラなどもある。

また、園路は車いすやベビーカーでも散策できるよう整備され、桜が成長すれば、池に沿って植栽されたサクラが水面に映る景色も楽しめる。

植樹イベントに参加した小学5年の水取愛稀（みとりあき）さん（11）は「今日植えた桜がいつか満開になって、ここに来る人達を笑顔にできたらいいなと思う」と話している。

伊丹の伝統技術を後世に伝えるとともに緑ケ丘公園の新しいシンボルとなるよう市民の力で守り育てていきたい。

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉（筆名「丹城」）が、昭和11年（1936）1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。

生物多様性の取り組み 伊丹市が全国1位に！

昆陽池の「野鳥の島」で外来植物を駆除する市民ら

伊丹市が、生物多様性に優れた自治体ランキングで、全国665自治体の中から神戸市など3市とともに1位に選ばれた。

三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング（株）が、都市の生物多様性指標研究会とともに平成28年（２０１６）11月30日に公表した。

住民・企業との協働により調査や計画の進行管理などを行っている点が評価された。

市民活動で特に大きな役割を果たしているのは、平成18年から昆陽池公園を中心に活動している「伊丹の自然を守り育てる会」（会員約30人）。活動は、昆陽池でのヨシ原の再生、絶滅が危惧されるオニバスの保護増殖、ホタルの再生など多岐にわたる。

カワウの被害によって樹木の枯死が深刻だった野鳥の島（日本列島）は、この10年の植栽の取り組みを経

市民と企業、行政が協力し合う

て、新たに林ができつつある。植える木はクヌギのほか、猪名川流域など周辺の里山の木や市内の古木の種から育てた地域産の苗木。ヨシ原も徐々にではあるが再生が進み、水路ではホタルが飛び交うなど、取り組みの成果が着実に表れている。

同会の村上敦子副会長は伊丹で農業に携わり幼いころから自然に親しんできた。「自然に触れる楽しさが活動の原点。自然はいい意味で人間の思い通りにならない。何よりいろんな人たちと一緒に活動できることができることがうれしい」と話す。

この会は、市が「昆陽池水辺環境再生検討委員会」を設置したのがきっかけとなって発足。委員には、それ以前から市内で活動していた環境保護団体「あーす・いたみ」やラスタ自然クラブの参加者が選ばれ、自然保護に長く関わっている人も多い。

またこの活動には、住友電気工業伊丹製作所や尼崎信用金庫桜台支店・鴻池支店などの地元企業、県立伊丹北高生物部、市立伊丹高生物部、有岡エコクラブ、国際ソロプチミスト伊丹などが参加・協力している。

中でも住友電気工業伊丹製作所は、平成20年度から延べ約560人が活動に参加。地域貢献として何かできないかと市へ問い合わせたことがきっかけだった。安全環境部主査の福本孝宏さんは、「夏や冬は大変な作業ですが、ボランティアの方と触れ合いながらの活動は、企業にとって貴重な機会です」と話している。

そうした市民活動などを行政の計画として位置づけ、平成26年3月に策定されたのが「生物多様性いたみ戦略」だ。伊丹に残された自然環境を市民とともに再生・保全していくという考え方が基になっている。

歴史ある昆陽池の自然と市民協働による長年の自然保護活動、そしてそれらをいち早く生物多様性という視点で再構築したことが今回の結果にもつながっているといえよう。

伊丹市は、猪名川と武庫川という大きな河川が流れ自然公園も比較的多い。自然に触れられる機会に恵まれたまちだ。しかし、手つかずの自然ではないからこそ、植物や生物のあり方は、私たち一人ひとりの生活と密接に関わっている。

今回の結果を機に、自分の周りにある自然をもっと見つめてみたい。

（丸晴子）

郷土史こぼれ話 ⑮

「日本初の天守は伊丹城」が消えた！ そのミステリーを追う

寛文９年（1669）伊丹郷町絵図 部分（伊丹市立博物館所蔵）
「本丸」の南側に「天守土台」があったとされる記載がある

「城の美は天守に極まる」と言われるが、その天守（天主）は、長い間、伊丹氏が造った伊丹城が日本歴史の初見とされてきた。

それが突然、否定されたのだ。何故か。

江戸後期の国学者・塙保己一（はなわほきいち）（１７４６～１８２１）が、幕府の後ろ盾を得て編纂した「群書類従（ぐんしょるいじゅう）」（１７７９～１９０９）という書物は、我が国の古書を集編・合刻した集大成の叢書で学術研究に多大の貢献をしている。

その中に「細川両家記」という室町時代の書物が載る。両家記は、京都を中心に将軍を補佐する管領家のお家争いを描いた戦記物である。

実はその本に伊丹城の天守記事があった。「伊丹但馬守、野間豊前守の二人の武将が、城の四方の木戸を閉じて家々に火を放ち、天守で切腹した」（１５２０）、と書かれているのだ。これを根拠に長い間、日本史は伊丹城を天守の初見として認めてきた。

今のような印刷技術がなかった昔は、書物はみんな原本を書き写す写本で広められた。昭和50年代になって、ある学者が群書類従の「細川両家記」の過去の写本を丹念に調べ上げた。すると古い年次ほど「主殿（しゅてん）」で切腹」と書かれ、ある時期から「天守」に間違って写されていることがわかった。

「主殿」は、館の意とされる。今は天守の意味が改めて論議され、織田信長が築いた安土城（１５７６）が確実な最初の例とされている（「サライ～城と武将と城下町」２０１２年８月小学館発行）。

歴史はミステリーである。

（郷土史研究家　森本啓一）

第４回 日本一短い自分史

大賞に千代田区の宮原さん「大トイレ番長」

小学１年時の宮原さん

ことば蔵はこのほど、「一発逆転の大チャンス」をテーマに募集していた「日本一短い自分史」の大賞に東京都千代田区の会社員、宮原佑介さん（28）の作品「大トイレ番長」を選んだ。

日本一短い自分史の募集は平成25年度から始まり、今回が4回目。今回は昨年9月1日から募集し、市内外から計153点の応募があった。

審査員は伊丹大使の坪内稔典・佛教大名誉教授、永吉雅夫・追手門学院大教授、中周子・大阪樟蔭女子大教授の3人。宮原さんは「小学校時代の個室トイレでの些細なエピソードだが、人生における『一発逆転の大チャンス』は身近にあり、いつの間にかひっそりと訪れるものだと思う。トイレは我慢するとろくなことがないことを伝えたい」と話していた。

秀作入賞者は、愛知県刈谷市の竹内祐司さん（54）、神戸市の岸節子さん（62）、東京都板橋区の一ノ瀬明男さん（60）の3人。

大賞作品の全文は以下のとおり。

◇　◇

小学校の頃、男子であれば大トイレには行きにくかったものである。お腹が弱い、かつ、家が学校から遠い私は、いつもお腹が痛くならないよう祈りながら、学校の授業が終わると、そそくさと家に帰っていた。

3年生になると、授業のコマ数が増え、学校にいる時間も増えた。この時初めて大トイレをこっそり使うようになった。いや、使わざるを得ない状況に陥ったのだ。当時は、大トイレに入っていることが友人に察知されると、誰であれみんなから、からかわれていた。これも男子小学生の宿命なのかもしれない。

ある日、いつものように大トイレを使うと、出てきた際にクラスの大将に出くわしてしまった。教室に入ると早速、私が大トイレを使っていたことを大きな声で話していた。何も悪いことをしていないけれど、恥ずかしさで委縮してしまう。なぜか、私を見る友人の目が憐れみを浮かべているように見える。

翌週、またお腹が痛くなった。今度は友人に察知されないよう、6年生の階で大トイレに入った。こっそり後をつけられてきたのだろう。トイレから出ると、また大将が部下をひきつれて私を指さし笑っている。「また、こいつ大トイレに入っとるんか。」みんなの笑い声がトイレに響く。その時、隣の大トイレで水が流れる音がするやいなやドアが空き、身体の大きな6年生が出てきた。すると、突然大将の胸倉をつかんだ。洗っていないその手で。「お前は、一回も大トイレに入ったことはないんだな?」「いえ、あります。」「じゃあ、いちいち大トイレに入ったくらいで、うるさくするなよ。」大将が思いっきり壁にたたきつけられた。

その日から、大トイレに入っても、からかわれることがなくなり、周囲から「お前のお陰で、安心して大トイレに行ける。」という変な感謝をされた。これを機に友人が増えた私は、すっかり自信をつけ、6年生時には「大トイレ番長」として学校に君臨することになる。

この印刷物は5000部作成し、印刷経費は１部あたり19円です。

WBCで4強日本チームの坂本勇人選手

元監督らが小学生時代を語る

3月に行われた野球の国別世界一を決める「ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）」に本市出身で巨人の坂本勇人内野手（28）が主力選手として出場、日本を4強に導いた。

坂本選手は小学校6年間、米大リーグ・ヤンキースの田中将大投手（28）とともに昆陽里タイガースでプレー。青森の光星学院高（現八戸学院光星高）時代に春のセンバツに出場、ドラフト1位で巨人に入団した。昨年、遊撃手としてはセ・リーグ初の首位打者となる快挙を成し遂げた。

小学3年時の坂本選手（右）と田中選手

坂本選手をよく知る昆陽里タイガース元監督の山崎三孝さん（72）と、チームメートだった松村昌哉さん（28）、野条淳己（あつみ）さん（28）に当時を振り返ってもらった。

◇　◇

山崎三孝さん　勇人は小学校入学直後、昆陽里タイガースのデビュー戦第1打席でいきなりヒットを打ったのを覚えています。勇人は左利きだったのですが、右投げ用のお古のグローブを使っているうちに自然と右投げになり、バッティングは両打ちに。小学校のグラウンドのレフト側に校舎があり、打球を校舎に当てようと田中らと競い合ううちに、右打ちが得意になって校舎3階の窓ガラスに当てたこともあります。

小学校最後の県大会の準決勝と決勝が行われる最終日、勇人を準決勝の先発投手に指名しました。勇人は決勝で投げたいと拒否したのですが、準決勝を勝たないと決勝には進めないと説得し納得してくれました。決勝では1点差で負けてしまいましたが、1番になりたいという性格が表れた出来事でした。

勇人は走攻守の3拍子そろった万能選手。いずれは、トリプルスリー（打率3割以上・本塁打30本以上・盗塁30個以上）を達成できると確信しています。

松村昌哉さん・野条淳己さん　勇人は野球のTVゲームでも練習後にしていたサッカーでも、とにかく負けず嫌い。小学6年時に投票でキャプテンに選ばれ、人一倍監督から叱られていましたが、常に先頭に立ってチームを引っ張ってくれました。2年前に巨人の主将に就任した勇人が、チームを日本一にする姿を見たい。そして、日本球界で長く活躍して、史上2人目となる3千本安打を達成してほしい。

現代人物風景

伊丹の歴史に光を当て続ける

写真協力＝西田写真館

90歳を超えてもなお現役の郷土史研究家。市史の話になると、椅子からさっと立ち上がるやいなや、自宅に所狭しと並ぶ資料の中から最適なものを取り出し、解説を始めた。

明治元年（1868）以来、代々、猪名野神社宮司を務める津田家の5代目、義行さんの次女として生まれた。奇遇にも父・義行さんは、小林杖吉創刊の「伊丹公論」第2号（1936年発行）の「現代人物風景」に猪名野神社宮司として取り上げられている。

郷土史研究家 津田 彰子さん（93）

神職の家の者として国学の勉強に取り組むうち、自身も歴史の研究に没頭するようになった。また、女学校時代の課題で家紋について調べたところ、津田家紋と猪名野神社の神紋が酷似しているという偶然から、家柄にも興味を持つようになった。

戦後、親族の医院を手伝うため伊丹を離れていたが、帰郷してからは猪名野神社を支える一方、神社の倉庫に眠っていた古文書を独学で片っ端から解読し、伊丹の歴史に光を当てていった。

最近では、源頼朝の叔父にあたる源為朝が伊丹に一宿した際に、夢のお告げによりその根元を掘り起こしたといわれる「天王松」の所在を明らかにした。

「これまでいろんな方が文献や情報を提供してくださった。私は恵まれています」と津田さんは振り返る。猪名野神社の近くに暮らし、炊事、洗たく、庭の手入れもすべて自分でしている。健康の秘訣は歩くこと。市内ならたいていの場所へは徒歩で行く。

歴史の研究をしているときが一番楽しいという津田さん。今も、古文書から得られた情報をノートにまとめる作業に余念がない。古文書の解読に欠かせない辞書は、すり切れてボロボロだ。

津田さんは「これからも古文書や史学に親しんで研究を続け、後世に伝承していきたい」と意欲を燃やしている。

（辻野文三）

郷土土産品紹介

桜スイーツ和洋の競演

毎年春になると本市では、伊丹ゆかりの「日米友好の桜」を記念した〝桜スイーツ〟が和洋菓子店から販売される。その中から、今年の新商品2点を紹介したい。

1点目は「Smile-Yamすみれ家」の「桜村雨（むらさめ）たると」（1個170円）＝**写真右**。

塩漬けにした桜の葉を刻んでこしあんと一緒に練り、白あんと米粉で混ぜて蒸した村雨という生地で巻いてある。桜の花でデコレーションされ、見た目のかわいらしい和菓子だ。

歯ごたえのある食感の村雨にほんのりとした桜風味のあんと塩漬けした桜がよく調和している。

店内のショーケースには、こしあんとインゲン豆を別々に炊き合わせることで食感も楽しめる「桜どら焼」（1個150円）など常時30種類ほどの菓子が並び、選ぶのに迷うほどだ。

2点目は「ケーキの店フランダース」の「桜のオムレット」（1個250円）＝**写真左**。

桜のピューレと一緒に炊きこんだ白あんと、桜ペーストをベースにしたプリン、生クリーム、イチゴがふわふわの生地に包まれている。ひと口食べると幸せな気分になれる洋菓子だ。生地もほんのり桜色で、いかにも春らしい。

店内には他にも「苺のタルト」（1個450円）など春らしいお菓子が並んでいる。

和洋二つの桜のお菓子。春の散歩やピクニックのお供にもってこいだ。

（龍田起代子）

Smile-Yam すみれ家
鴻池5丁目2番11号
☎072・772・0772

ケーキの店フランダース
昆陽東3丁目1番5号
☎072・777・4561

老舗探訪

有限会社 大路旗幕（おおじはたまく）

伊丹市鋳物師2丁目2番
☎072－770－7061

店ののれんや旗、のぼりは、街の至る所で見られ、私たちには身近な存在だ。これらを製造販売する、いわゆる染め物屋さん。昔は、藍染をすることから「紺屋（こうや）」とも呼ばれ、全国どの町にも1軒はあったそうだ。

創業は昭和52年（1977）だが、ルーツをたどれば、明治34年（1901）創業の大路光染工場にさかのぼる。そこから、のれん分けで大路秀染工場が発足、さらに同工場から縫製部門と営業部門をのれん分けしてもらって事業を始めた。

創業当初は認知度が低く、看板屋や飲食店などに飛び込みで営業回りを続けた。製造現場にはパソコンはなく、染める文字を1字ずつ手書きで型を起こしていた。

創業者は現会長の大路康宏さん（70）で、平成3年（1991）、市議会議員に初当選したとき、2代目の周宏（ちかひろ）さん（44）に経営を譲った。

代表的な商品は、祭礼用の法被（はっぴ）、のぼり、祝い幕、応援幕、のれん、チームTシャツ、看板など。伝統的な染めの技法を大切にしながら、顧客の多様なニーズに応えている。

今はインターネットのおかげで阪神圏外からも注文が来てネットで打ち合わせができる。しかし、法被や神社ののぼりなどの手染め商品については、顧客と色目などの仕様を細かく詰めていく作業を大事にしている。

広告媒体の主流が紙からインターネットへと移行し、近い将来、紙と同じく布も需要が減ってくる。周宏さんは「デザインが多様で複雑化する中で、デジタル技術を磨きながら、伝統的な染めの技術を守り、存続させたい」と話している。

（辻野文三）

伊丹俳壇

「鴨」　坪内稔典　選
（佛教大学・京都教育大学名誉教授。柿衛文庫也雲軒塾頭）

最優秀賞

とまらないかっぱえびせん鴨の寄る　長谷川　博（大阪府高槻市）

かっぱえびせんは、もしかしたらカモの餌として持ってきたのかも。カモにやる前に食べ始めたら止まらなくなった。カモたち、心配してぞろぞろ集まってくる感じ。おかしくて楽しい句だ。

優秀賞

ミコアイサ・キンクロハジロみんな鴨　屋部きよみ（伊丹市）
スキップは出来ないけれど鴨に会う　平　きみえ（伊丹市）
日曜日晴れ鴨を見に来ませんか　小松　房子（伊丹市）
給餌係の長靴つつく鴨一羽　渡邉　美保（伊丹市）
鴨鍋や娘の彼は左利き　藤田　晋一（宝塚市）

伊丹歌壇

「贈り物」　尾崎まゆみ　選
（「玲瓏（れいろう）」選者。神戸新聞文芸短歌選者。現代歌人協会会員）

最優秀賞

発送は四百年前船乗りを北へ導く光が届く　須磨　蛍（神奈川県鎌倉市）

一番素敵な贈り物は何だろうと、それぞれ真剣に考えられたからだろう、素敵な作品ばかりだった。どれも輝いていたのが、今回はポラリスを。四三三年前、つまり私たちはだれも生まれてない時代の光を今浴びている！

優秀賞

酔ふ度に贈与税など気にするな遺すものなど無いと笑む父　小田　虎賢（明石市）
大根の帰宅のドアに吊されて友の笑顔の残る玄関　小田　慶喜（明石市）
泣き笑いしていた日々も愛おしく贈り物だね子育ての日々　松井　幸子（山形県鶴岡市）
春一番吹いてお腹の声を聞く聖母の様な後ろ姿で　須山　恵美（神奈川県横須賀市）
母親は米とみかんを父親は本を一冊次男のための　近藤　きつね（群馬県高崎市）

次回の兼題は、俳壇は「青田」、歌壇は「パン」とします。応募は１人各１作品、自作未発表作品に限る。応募締切は、来年４月30日（必着）。最優秀賞には図書券千円進呈。左のＱＲコードを利用すると、ケータイからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。

林やよい
伊丹市在住。毎日新聞兵庫版にイラストエッセイ「くるまいすまいる」を連載中。

春、歩くのが楽しい

ことば蔵起終点の緑道＋αコースはいかが

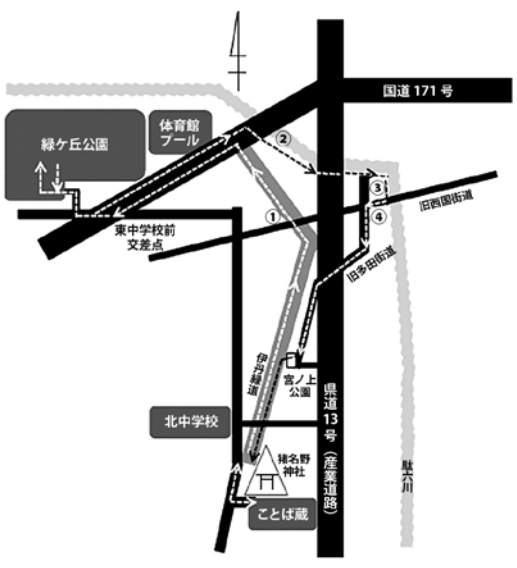
木々を眺めながら散歩を楽しめる緑道

伊丹には、緑が美しく歴史の息吹を感じさせる道も多い。市が作成した「いたみウォーキングマップ」や「伊丹散策マップシリーズ」などを参考に、ことば蔵を起終点とした春のウォーキングにぴったりのコースを自分で設定し歩いてみた。

◆往路　ことば蔵のすぐ北にある猪名野神社の西側を回り北へ進むと、伊丹緑道へ出る。木々や竹の緑が美しく、散歩やジョギングを楽しむ人が多い。左手に緑の崖、右手に産業道路を見下ろせる。吉田茂の片腕と言われた白洲次郎邸の屋敷跡を示す案内碑もあった。

伊丹坂トンネルの上にはちょっとした展望台があり、眺めを楽しめる。北へ進むと「伝和泉式部の墓」の案内板があるが、今回はスルーして伊丹坂へ到着（右下地図①）。旧西国街道と交差したところにある。

伊丹緑道は、この先の国道171号で途切れると思いきや、実はその北側にある緑ケ丘公園まで続く。猪名野神社から約1・2キロに及ぶ貴重な緑の散歩道だ。



◆帰路　緑ケ丘公園を出て再び国道171号を渡り、駄六川沿いの道を下る。江戸時代、伊丹の名酒を江戸へ運ぶ船の往来が盛んだった川だ。途中、ゴム製の可動堰（せき）があり（②）「ラバーダム（空気式）」と書かれていた。どう動くのか見てみたいものだ。

産業道路を越え、さらに駄六川沿いを下り、旧西国街道との交差点で右（西）に曲がると、今度は旧西国街道と旧多田街道の交差点に旧摂津国の中心（へそ）を示す「辻の碑（いしぶみ）」（③）がある。休憩場所もあり、疲れた体を休められる。

旧多田街道を南へ少し下ると、水車小屋（④）が見える。これは大正時代まであったものの復元版だが、稲作が盛んだった往時がしのばれる。

産業道路を渡り、伊丹緑道を右手に見上げながらさらに旧多田街道を下っていくと、宮ノ上公園がある。その奥にある階段を上ると緑道へ戻るので、来た道をたどり、ことば蔵へゴール。

距離にして約4キロ。休憩しながらの2時間弱は、さまざまな発見もあり楽しかった。みなさんも春の風を感じながら歩いてみてほしい。

（細尾哲也）

元おかみのきまぐれコラム

もらいました市バス特別乗車証 ～悲しいけどうれしい

70歳になったとき、役所から市バスの特別乗車証が送られてきた。うわあ、うれし。でも、ちょっと待てよ。私もこんな年になったということか。悲しい。でもよく考えたらうれしい、助かる。アリガタイアリガタイ。まずは市バスで昆陽池に。ハクチョウ、カモ、ミヤコドリを見に行った。

特別乗車証を持って初めて市バスに乗ったとき、運転手さんはどんな顔をされるのだろうと心配だったが、なんのことはなかった。

ある日、市バスに乗ってから特別乗車証を忘れたことに気づいた。すごーく悔しかった。と同時に210円の小銭が財布になかった。こういうときは落ち着けないものですね。あわてるし血圧は上がるし。こんなときは、恥ずかしいやら情けないやら、自分のことが嫌になる。

仕事に行くときも往復、市バスに乗るのでとても助かっている。1日に3、4回乗ることもあるし。

今朝は雨。バスに乗って出かけよう！「行ってきまーす」「いってらっしゃい」という人はいないけど。

（平きみえ）

酔後録 15杯目

今年は酉年＝酒の年だ

▼酉年は酒の年

今年は酉年。この「酉」という字は徳利の形から来た象形文字で、水を意味する、さんずいが合わさって「酒」という字になったと言われている。また、十二支はそれぞれの月を表している。

10番目の酉の月は酒造りの季節ということから、鳥ではなく酉の字が使われたとも言われ、「日本酒の日」はその酉の月である10月の1日となっている。ということは、今年は酒の年だ。しっかり酒を味わいましょう♪

▼常連のごとくふるまう

伊丹からは遠い場所に親しくさせていただいているお店がある。一見、バーだが、すっかりくつろげてつい長居してしまうお店。拙者が訪ねたのは4回なのに、2回目からは名前に「ちゃん」づけして呼んでくださる。

「はい、おつまみあがったよ」とカウンターの向こうから声をかけられると、拙者が運び、日本酒は勝手に飲み放題状態？となる（笑）。ホントによく飲ませてもらっているし、手作りのおつまみも絶品！

こんなお店が遠く離れた地で持てるというのはありがたいことだ。

（ときわ喜多）